静岡新聞 2020 年 10 月 3 日 付

論壇

大教室からオンライン

学習院大教授（国際経済学） 伊藤 元重

コロナ機に「教育の歪み」再考

大学に入学して最初に受けた授業のことを、今でもよく覚えている。大学では経済学を学ぶということで、1年生の時に、教養課程の経済学の入門の授業を取った。担当していたのは当時の日本では著名な内田忠夫教授であり、使用する教科書は世界的に有名なサムエルソンの経済学であった。大学での新生活ということもあり、張り切って教室に向かった。

人気の授業ということもあったのか、教室には何百人もの学生が押しかけ、教室は満杯状態であった。かろうじて階段教室の上の隅の方に席を確保したが、はるか下にある演壇の先生の姿は豆粒のように小さくしか見えない。遠くで話されている内容も聞き取りにくく、途中で挫折してしまった。教科書を1人で読んでなんとか単位はもらったが、大教室での講義に幻滅したことを覚えている。

それでもつい昨年までは、日本中の多くの大学で大教室の授業が続けられてきた。入試で学生数を絞り、その学生に大教室での授業を提供してきたのだ。限られた教員で学生に多くの授業を提供するには避けられないことなのかもしれない。

コロナ危機がこうしたことを大きく変えようとしている。いま、ほとんどの大学で大教室は使われておらず、学生たちはパソコンでオンラインの授業を受けている。オンラインの授業であれば、10人であろうと1万人であろうと授業の中身は変わらない。教室の容量をはるかに超える受講生を取ることが可能だ。各大学がそれぞれ同じような科目の授業を提供するのではなく、多くの大学の学生に共通の授業を届けることも可能となる。

そういえば昔イタリアで聞いた話がある。現地では有名な大学であるが、そこでは入試のないプログラムがあるという。一定の条件を満たせば、学生は誰でもその大学のプログラムの授業を取ることができる。受講生は大きな数となるので、最初の年の授業はテレビのような方法で提供される。ただ、その講義を受ける学生はリポートや試験で成績が付く。大人数の受講生の場合には、大学院生などが補助作業員として採点をするのかもしれない。そしてある程度以上の成績を挙げた学生のみが、このプログラムを続けることができる。当然、2年目以降は少人数のクラスが中心になる。

大学入試で「門前払い」

この事例が面白いと思うのは、最初の年に入試で門前払いをしないで済むということだ。希望する学生には全て、オンラインの授業を受けてもらう。そしてそこでの成果を評価した上で、2年目以降の受講人数を絞っていく。こうした方式の方が教育効果が高いように思える。

日本では大学入試のために懸命に勉強するが、大学に入ってしまうと後は勉学の意欲が下がる学生が多い。入試で厳格に門前払いしてしまうのにも問題はあるし、入試を通ってしまえば後は勉学をする意欲が薄れるというのも問題だ。おまけに、その大学で多くのマス教育が提供されているということも問題だろう。コロナ危機は、大学教育のそうした歪みについて考え直すよい機会を提供している。

＊この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。 無断転載、複製を禁じます。